

## 黙示録14章6－13節 「福音と神の御怒り」

### 1A 永遠の福音 6－7

1B 世界への宣教 6

2B 創造主への回帰 7

### 2A 大バビロンの崩壊 8

### 3A 獣の国の住民への裁き 9－11

1B 自ら拝む者 9

2B 御怒りのぶどう酒 10

3B 世々に渡る苦しみ 11

### 4A 聖徒たちの忍耐 12－13

1B 戒めと信仰 12

2B 死ぬ者の幸い 13

## 本文

黙示録 14 章を開いてください。今晚の学びは、6-13 節です。(本文を読む。)神が、ご自分に反抗して、神ではないものを拝み、聖徒たちを迫害する者たちに対する報いを必ず行われることについて見ていくこととなります。これまで、獣の国において、聖徒たちは獣の像を拝まないことによって殺され、また獣の数字の刻印を押されないことによって、売り買いできない状況でありました。この時、最後の三年半は、獣が聖徒たちに勝利するようにされているので、彼らはただ死んで行く他はないのです。そのような悪に対して、神は激しい御怒りをもって報われます。

私たちは、この世にある悪に対しては、神が必ず報われる方であることを知ることは大切です。そこに慰めを得て、安きを得るからです。テサロニケの信者が激しい迫害を受けていることについて、パウロは、神の容赦ない裁きが下ることを第二の手紙で教えていました。「1:4-8 ですから私たち自身、神の諸教会の間であなたがたを誇りに思っています。あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っています。5 それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。6 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。8 主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。」

私たちが、これから、主のみこころを行おうとする時に、嫌がらせを受けるかもしれません。そのような時に、その人を主が裁かれるのだと知ることは、主に復讐や裁きを任せることとなります。

パウロが、次のようにロマ 12 章で話しました。「12:19 愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。」このことによって、慰めと安きを得ます。そして、敵をむしろ憐れむ心が与えられ、その人のために祈り、善を行おうとさえ思うのです。

### 1A 永遠の福音 6-7

今晚は、6 節から 13 節まで、三人の御使いが、これからの神の裁きを宣言するために遣わされているところを読みます。

### 1B 世界への宣教 6

<sup>6</sup> また私は、もう一人の御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は地に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。

御使いが「中天」を飛んでいます。以前、第五の御使いのラッパ、第六と第七の御使いのラッパが吹き鳴らされる前に、「わざわざいだ、わざわざいだ、わざわざい来る。」と叫んだ、中空を飛んでいたわしがいました。その後三つのわざわざい下がったのですが(8:13)、同じように御使いが、これから起こることを予告しています。

そしてこの御使いは、なんと「永遠の福音」を携えていると言っています。主が、患難期の後半にあたって、最後の機会を地上に住むあらゆる人々に与えておられるのです。なぜ御使いなのか？一つに、主の証しをする人が極限にまで少なくされているということでしょう。教会は携拳され、地上で主を信じる聖徒たちは殉教します。そして今、残された者たちも獣の印を受けるのを拒むので間違いなく殺されていきます。それでも主は、御使いを遣わして福音を伝えさせるのです。「マタ 24:14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」とイエス様が言われました。主は宣教者が枯渇していても、この御心を行なうために御使いを使われるということです。

主がそのただ一人さえ、悔い改める者がいるのであれば滅びから免れさせたいと願われている、その憐れみの心がここにあります。ロマ 11 章 25 節には、「異邦人の満ちる時」という言葉があります。異邦人に対する救いが満ちたら、イスラエルがみな救われるとパウロは論じていますが、

### 2B 創造主への回帰 7

<sup>7</sup> 彼は大声で言った。「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」

この「永遠の福音」には、私たちが知っている、主イエス・キリストが罪のために十字架で死なれ、

三日目によみがえられた、という内容が入っていません。しかし、すべての前提になる、根本的な呼びかけが入っています。神を畏れ、神に栄光を帰すること、そして礼拝することです。神がおられることを認めなければ、大前提として福音が成り立ちません。終わりの日、神を冒瀆し、人間至上主義に陥っている獣の姿を私たちは 13 章で見ました。すべてのことが神から来ていることを認めて、それで自分の意志、自分の知性、心を神の前に差し出すのが礼拝です。それができて初めて、イエスが自分の罪のために死なれて、よみがえられたという福音を信じることができます。

そして、この神が「天と地と海と水の源を創造した方」であるということです。獣の国において、像を拝むという偶像礼拝をさせられているのです。そして、ラオディキアにある教会は、「自分はもう十分です、神を必要としていません。」という文化があったので、イエス様はご自身を彼らに表す時に、「神による創造の源である方(3:14)」と言われていました。天地を造られた神を神としてあがめず、偶像を拝む罪を犯していました。これが、今の時代の問題の根本でしょう。ヨハネは、第一の手紙で、終わりの日に多くの反キリストが起こると言いましたが、肉体をもって現れたキリストではなく、知識と呼ばれているものを信奉して、偶像を拝んでいます。そこで手紙の終わりは、偶像から離れなさいという戒めになっています。パウロが、ロマ 1 章で、人々が、不義によって真理を阻んでいて、それは神の神性と永遠の力は、被造物に明らかに啓示されているのに、「神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなった。(21 節)」と言っています。朽ちない神の栄光を、偶像に変えてしまったことを話しています。

## **2A 大バビロンの崩壊 8**

<sup>8</sup>また、その御使いの後にもう一人、第二の御使いが来て言った。「倒れた、倒れた、大バビロンが。御怒りを招く淫行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた都が。」

二人目の御使いが、次の神の裁きを宣言しました。バビロンの倒壊です。ここから、黙示録の中で大きなテーマになっていきます。16 章の最後のところに、大バビロンが倒れることが再び書かれており、そして 17 章と 18 章にて、主はヨハネにバビロンの崩壊について啓示を与えておられます。その倒壊があつて、天に大歓声が起き、それから 19 章で、主が地上に再臨される場面が出てくるのですから、大バビロンの存在は霊的に非常な大きな意味を持っています。

バビロンは、聖書の中において、イスラエルとエルサレムの町が滅ぼされ、ユダヤ人を捕囚の民とした、ネブカドネツアル王による国として登場します。けれども、その前からバビロンは、神のご計画の中では初めから登場しています。創世記 10 章にて、ニムロデという人物が最初の権力者になったことが書かれていますが、彼は神に反抗する権力者でした。シニアルの地で町々を建てたことが書かれていますが、そこはバビロンの地域です。実はイザヤ書によると、バビロンに対する預言の中で、天地創造を神が行なわれる前に、ルシファーが天から墮落して悪魔になったことが預言されており、エデンの園にて蛇として現われるのですが、そこもバビロンの地です。さ

らに、人々が地に満ちるように、と主は命じられていたのに、一つのところに集まって、町を建てて、塔を建てて、天にまで届き、自分の名をあげようとしたのはバビロンの地です。主は言葉をばらばらにされましたが、それは強制的に彼らが地上に散らばっていき、そこでへりくだった生活を送るようになるためでした。私たちは、言葉が一つであれば本当に便利なのだと思いますが、もし一つであれば、神に反抗し、自らを神にしようとする動きを一致して行ってしまうことでしょう。

そしてこの町を首都として、ネブカドネツアルが人類の歴史において初めて、世界帝国を築きました。そしてバビロンが、イスラエルとエルサレムの町を滅ぼすために主に用いられました。このように、バビロンは、相集まって神に反抗して、自分たちを神にしようとする動きの代表格であります。

このことから私たちは、人間を中心に世界をまとめようとする動きを警戒しなければいけないことが分かります。政治と経済の統合、そして宗教統合はまさにバビロンの動きです。ところでバビロン国は、ダニエル書に記録されているように、メディア・ペルシア国によって滅ぼされました。それでもバビロンの町は、世界経済や世界政治の中心地として、メディア・ペルシア帝国は用い続けましたし、またギリシアのアレクサンドロス大王も用い続けました。ローマに代わってから廃れはじめ、それからは廃墟の町となりました。このことが、イザヤ書 13-14 章と、エレミヤ書 50-51 章に克明に描かれています。今私たちが読んだ、「バビロンが倒れた。バビロンは倒れた。」という言葉は、イザヤ書 21 章 9 節からの引用です。

けれども、ヨハネが黙示録を書いているのは紀元 90 年代ですから、とっくの昔にバビロンは滅んでいるはずなのに、再び登場します。つまり、再び現われることとなります。ゼカリヤ書に、終わりの時にシアルの地に「罪悪」と呼ばれている、エパ枳の中にいる女の姿がふたり出てきます。彼女たちはシアルの地で自分たちのための神殿が建てられる、との預言があります(ゼカリヤ 5:5-11)。そこで文字通り、今のイラクの地にバビロンが建設されるのか、あるいは、バビロンに代表された相集まって神に反抗する中心地が他に出来るのかは分かりません。ヨハネが啓示を受けた当時、それはローマであった可能性は大きいです。ペテロは、第一の手紙で、挨拶にバビロンにいる人々にしていますが、それはローマで会った可能性が大きいです。いずれにしても終わりの時にバビロンが建て上げられるのです。

「御怒りを招く淫行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた都」ということですが、大バビロンの罪悪とは、「淫行」というぶどう酒をすべての国々に飲ませることです。覚えていますでしょうか、ティアティラにある教会に、イゼベルと呼ばれる女預言者が教会の中におり、「2:20 わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。」とイエスさまは叱責しておられます。ティアティラの教会の問題を思い出してください。ギルドという商人たちの組合がありました。そこで、異教の儀式に関わるようなものがあり、そこで乱痴気騒ぎをします。それに関わらなければ、商売ができないという圧力がありました。それで、やっていいのだよと言

っていたのが、この女預言者です。そして、性的逸脱と宗教が混ざっていて、しかもしれは経済的利益のために行っていくのです。悔い改めなかったら、「大きな患難の中に投げ込む(2:22)」とイエス様は言われました。

これが、バビロンの大淫婦のしていることです。偽りの宗教が使われます。そして、経済的利益のために、神との純真な関係ではなく、偶像礼拝に堕しているのです。17章には、その偶像礼拝的な偽りの宗教の姿が前面に出ていて、18章には莫大な富を集めているバビロンの姿が出ていて、そこでバビロンが倒壊するのです。

### **3A 獣の国の住民への裁き 9-11**

<sup>9</sup> また、彼らの後にもう一人、第三の御使いがやって来て、大声で言った。「もしだれかが獣とその像を拝み、自分の額か手に刻印を受けるなら、<sup>10</sup> その者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた、神の憤りのぶどう酒を飲み、聖なる御使いたちと子羊の前で火と硫黄によって苦しめられる。

第二の御使いは、獣の国に対する、神の激しい御怒りを宣言しています。今、バビロンが出てきましたが、17章を見ると、その大淫婦は、獣の上に乗っています。まずバビロンが滅ぼされて、それから獣が再臨のキリストによって滅ぼされ、生きたまま火と硫黄の池に投げ込まれる姿が19章に出てきます。

### **1B 自ら拝む者 9**

まず、9節ですが、獣の国において、それがいかに強制的に行われていようとも、ここを読むと、自らの判断と決断で、獣の像を拝み、額か手に刻印を受けているということになります。このような時に、「私たちは、強いられてそのようなことをしたのだ」と言うのかもしれませんが。けれども、実はそうではなく、それでも、まことの神を畏れ、神に栄光を帰すことはできたのです。

そして、「心がともなっていないから形だけ行なうのだったらいいのだ。」というのかもしれませんが。けれども、ローマ帝国において、カイサルは主であるということを口で告白さえすれば、心ともなわなくても、一向に構わなかったのです。それはカイサルに対する忠誠を誓うものであり、形だけでよかったのです。それを、心からイエスを主として信じている者としては、たとえ形であってもできなかったのです。心にあることが口から出て来て、心にあることが行いに現れるのです。心と形をわけるような霊肉二元論は、大きな問題です。

### **2B 御怒りのぶどう酒 10**

獣の像を拝まない聖徒たちは殺され、刻印を拒む聖徒たちは売り買いができず、餓死して死んだりするのでしょう。しかし、10節を見ると、死なないで生き残ったほうが、神の裁きの恐ろしさを思えば、もっと悲惨だということがわかります。刻印を受けた者たちのほうが、神によってさばかれ

て、死後に御怒りを受けなければいけません。

そしてここに「**神の憤りのぶどう酒**」という言葉が出てきました。詩篇には、こうあります。「【主】の御手には杯があり混ぜ合わされた泡立つぶどう酒が満ちている。主がこれを注ぎ出されると実にすべて地の悪者どもはそれを飲みかすまで飲み干す。」悪者が神の怒りを受けることが、ぶどう酒を飲むこととして表現されています。混ぜ物がないというのは、それだけアルコールの純度が高く、酔いが回ることを表しています。さらに、「神の憤り」という言葉ですが、ギリシア語には、怒りを意味する言葉として「**スモス**」と「**オルゲ**」があります。スモスは、ちょうど裁判官が犯罪人に刑の執行を行わなければいけない時のように、きわめて冷静に、理性的に考えて現わす怒りのことです。けれどもオルゲは、熱情のこもった「これでもかあ！」と叫ぶような怒りの現われです。新約聖書ではスモスがよく使われますが、ここ黙示録にて、「神の激しい怒り」とか、「神の怒りのぶどう酒」のところには、オルゲが使われています。

そして、「**聖なる御使いたちと子羊の前**」とあります。恐ろしいですね。彼らは、絶えず子羊を認めながら生きなければいけません。それがいかに聖なることかは、聖なる御使いがいることによって分かります。自分たちが、神の聖なる基準に照らし合わされて、それゆえに罪の定めと責めを絶えず意識しながら生きなければいけないのです。子羊が流した血によって、それが洗い清められるのに、そして聖なる神の前でも、白い衣を着て出ていくことができたのに、それを拒んだのですから、聖なる神の前で責めを負わないといけないのです。

「**火と硫黄**」というのは、ゲヘナのことです。イエス様が福音書でしばしば語られたゲヘナは、エルサレムのヒノムの谷のことを表してしまして、深く狭い谷底に、神殿で献げられたいけにえの老廃物など、いろいろなものが焼却されていました。それで、蛆がわいていて、火は消えないとイエス様が言われたのは、聞いているユダヤ人たちには、かなりどぎつい言葉であり、生々しいものだったのです。そして、主が御怒りを現わす永遠のところは、このような神の火による裁きの場であることを示しているのです。

### 3B 世々に渡る苦しみ 11

<sup>11</sup> 彼らの苦しみの煙は、世々限りなく立ち上る。獣とその像を拝む者たち、また、だれでも獣の名の刻印を受ける者には、昼も夜も安らぎがない。」

苦しみは「**世々限りなく**」続きます。そして、彼らは「**昼も夜も安らぎが**」ありません。地獄というものを少し考えてみましょう。地獄とは、聖なる神が人々に対して、「わたしの基準を満たすために、自分自身で贖いをしなければいけない。」と要求するところです。今私たちは、「神もキリストも要らないよ。自分で何とかやっていけるから。」という言葉聞きますが、実際に、そのような人たちの願いをかなえてあげられるところです。自分の行ないによって神の基準に沿うように贖わせるとこ

ろです。

けれども、もちろん、自分の行ないによって神の基準に達することはできません。その度に、自分を罪に定めなければいけません。「ああ、こういう良いことをしたつもりだったけれども、実に高慢であった。」など、自分が良いことを行なっているつもりが、聖なる神の前ではみな汚れた着物のようなのです。ですから、絶えず焦燥感の中で生きなければいけません。自分が神の基準に達成できないことに葛藤を覚えなければいけません。昼も夜も休みはないのです。いつまでも達成できませんから、永遠にこの苦しみは続くのです。イエスさまは、「ヨハ 3:18 御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。」と言われましたが、今、この地上にいる間に、神の恵みによる救いと、無代価で与えられる永遠のいのちを拒み、自分の行ないで生きていきたいのであれば、休みなき魂の中に留められるのです。

#### **4A 聖徒たちの忍耐 12-13**

これとは対照的に、聖徒たちはたとえ死んでも、慰めがあり、安息があることが約束されています。この対比をしっかりとわきまえることが、私たちの信仰の忍耐に必要なことです。

#### **1B 戒めと信仰 12**

<sup>12</sup> ここに、聖徒たち、すなわち神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける者たちの忍耐が必要である。

聖徒たちにとって、「神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける」ということがその特徴です。使徒ヨハネが、パトモス島にいる時に、「神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。」と証言しています(1:7)。その神の戒めの最も大きなものは、イエスご自身を信じる、神の御子キリストであることを信じ続けることです。この方に信頼し続けることです。主がどんな時にもおられることを信じることです。この方の真実を思うことです。

そして忍耐は、自分たちを苦しめる者には苦しみを神が与えられるということを知ることによって与えられます。自分が仕返しをするのではなく、すべてのさばきを主にゆだねます。13章で、獣の国で死んで行く時にも同じことを教えられていました。「13:10 捕らわれの身になるべき者は捕らわれ、剣で殺されるべき者は剣で殺される。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である。」剣を取りたくなるのですが、主が剣をもって戦ってくださることを信じて、忍耐するのです。

そして、聖徒たちはことごとく殉教していきますが、その死によって神の怒りのぶどう酒を飲まずにすみます。15章には、死後に、天において勝利の歌を歌っている殉教者たちの姿を見ることが出来ます。イエス様は、弟子たちにこう励まされました。「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。恐れ

なければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」と言われましたが、ほんとうに恐れなければいけないのは人ではなく神です。

## 2B 死ぬ者の幸い 13

<sup>13</sup> また私は、天からの声がこう言うのを聞いた。「書き記せ、『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである』と。」御霊も言われる。「しかり。その人たちは、その労苦から解き放たれて安らぐことができる。彼らの行いが、彼らとともにについて行くからである。」

初めの、主にあって死ぬ死者が幸いであるというのは、16 章に出てくる、獣の国に対する神の激しい御怒りと災いのことを思っていることです。その災いを見ることなく、死ぬことは幸いだということです。

そして、死後、ゲヘナにいる人々とは対照的に、天においてはすべての労苦から解き放たれて、休むことができます。ヘブル 4 章 11 節には、「この安息に入るように努めようではありませんか。」とありますが、天国に入るときに、私たちに安息が与えられます。地上では労苦があります。それは愛の労苦です。そこで同じくヘブル書の 6 章 10 節にはこう書いてあります。「神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れてりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」愛が動機となって行なったその行ないは、この世では認められなくても、天では必ず覚えられています。そこで、この黙示録の箇所でも、「彼らの行いが、彼らとともにについて行くからである。」とあります。これが、私たちの究極の慰めと安息を与えます。このことを思う時に、私たちは今を忍耐できるのです。